閉じる

現代英米文学特殊講義 II A

サブタイトル	ヴィクトリア朝小説の展望 – 宗教、科学、セクシュアリティ
担当者名	大石 和欣
単位	2
年度・学期	2019 秋
曜日時限	金3
キャンパス	三田
登録番号	40873
設置学部・研究科	前期博士課程（修士課程） 文学研究科
設置学科・専攻	英米文学専攻
学年	1, 2
分野	修士課程科目文学研究科科目

授業科目の内容・目的・方法・到達目標

この授業ではヴィクトリア朝小説について、研究アプローチとしてどのようなものがありうるのか、またその有効性を関連する小説を実際に読みながら考える演習です。
ヴィクトリア朝といえば、ディケンズやブロンテ姉妹、ジョージ・エリオット、トロロープ、ギッシングやワイルドなど著名な小説家の作品が多数あり、またそれ以外にも無数の小説が等閑視されたまま埋没している時代です。それらを二十一世紀という時代にどう読めばいいのでしょうか。これまでの研究を踏まえながら、十九世紀小説を読む視点と方向性を、フランシス・オゴーマン編『ヴィクトリア朝小説への手引き』に所収された論文を精読しながら、確認・吟味していきます。福音主義を代表例とした宗教の問題、ダーウィンの進化論を含む科学は19世紀のイギリスを考える際には重要なテーマですが、近年では無視できないテーマである「セクシュアリティ」や「ジェンダー」の問題、さらには旅行や移動というテーマ、それを含むヨーロッパという空間からみたヴィクトリア朝という視点、そして近年再び脚光をあびる「感情」という主題も重要です。こうした視点が、ヴィクトリア朝小説を研究するうえでどのように扱われてきたか、そして課題としてはどのようなものがあるのか、それぞれの論文を読みながら考えていきます。また、どのような新しい視点がほかにありえるのか、それらがどのようにヴィクトリア朝小説を読み直すことにつながるのかについても、考察してみます。
各論文を二回に分けて丁寧に読み、具体的な事例としてあげられている小説を実際に読みながら、解釈の有効性とより深い分析の可能性を探っていきます。研究アプローチの方法として、どのような視点や分析が可能なのか、基本的な手法を身につけつつ、議論の仕方についても考察していきます。

授業の計画

第1回
第１回 散文の位相 – 社会と文学
小説は散文の一種ですが、18世紀に誕生した「小説」というジャンルが19世紀においてどのように発展したのかを、同時代の詩やこれまでの研究の実態を俯瞰しつつ、その可能性を考えます。

第2回
第２回　作家は死んだのか —— ヴィクトリア朝と作家の立ち位置
小説テクストは作家から独立したものというのがロラン・バルト以降の定説になってしまっているが、ヴィクトリア朝小説を読む際にも作家は権威なき不要物と言えるのだろうか。作家を軸にして、ヴィクトリア朝小説への新たなアプローチを考えてみます。

第3回
第３回　ジェンダーとセクシュアリティ
ジェンダーとセクシュアリティというテーマは、ほかの時代の小説と同様ヴィクトリア朝文学を読むときにも不可欠のものですが、これまでの研究ではどのようなアプローチがとられていたのでしょうか。キャロリン・ディーヴァーの議論をもとにこれまでの研究の実態を俯瞰しつつ、その可能性を考えます。

第4回
第４回　女性と社会 —— ヴィクトリア朝の罪過
ヴィクトリア朝小説にはこの時代の女性たちが直面したさまざまな問題が浮かび上がっています。第３回の授業で俯瞰したジェンダーとセクシュアリティの問題が、そうしたものとどう絡まっているのか、またそれがこの時代の小説をどう形づくっているか、代表的な事例を参考にしながら考えてみます。

第5回
第５回　宗教を考える —— 小説の基底にあるもの
春学期に俯瞰した階級や帝国と同じように、「宗教」はヴィクトリア朝の社会や文学をくくるもう一つの大きな枠組みです。ヴィクトリア朝小説を解釈するに際して、どのような問題が宗教に関してあるのか、マイケル・ウィーラーの議論をもとにして、俯瞰的に考察してみます。

第6回
第６回　宣教と帝国
宗教はイギリス帝国の覇権維持にとっても重要な媒介物でした。その点を踏まえながら、植民地側からみた帝国の問題を、宗教という観点から、具体的な作品をとりあげながら問い直します。

第7回
第７回　科学と進化論　– ヴィクトリア朝文化の一断面
　ヴィクトリア朝を語る際に科学・技術の進展は不可欠の要素です。それらは消費文化と結びついて物質文化をもたらしただけではなく、この時代の人びとの思考や行動を支配していくことになったからです。進化論はそうした意味で重要な考え方です。それについてアンジェリク・リチャードソンの議論をもとにして俯瞰的に考察してみます。

第8回
第８回　動物と人間との間
進化論によって動物と人間との境界がかぎりなく薄くなったとき、人間の立場は生物学的にも、宗教的にも、さらには存在論的にもあいまいかつ不安定なものに変わっていきます。それがヴィクトリア朝小説にどのような形で浮かび上がっているのでしょうか。具体的な事例を参考にしながら考えてみます。

第9回
第９回　ヨーロッパという視座
従前の研究ではヴィクトリア朝文学はイギリスのなか、あるいは帝国という枠組のなかだけで考えられてきましたが、当時において実際はヨーロッパとも密接なつながりを持っていました。それをジョン・リグノールの議論をもとにして、考えてみます。

第10回
第１０回　島国と大陸の確執
19世紀におけるヨーロッパ大陸とイギリスの関係は、旅行や通商、外交だけに限定されたものではなく、思想や言語、宗教においても密接なものでした。翻訳を含めてヨーロッパとの思想、言語、宗教を媒介にした関係を、具体的事例にそった考えてみます。

第11回
第１１回　感情と言語
18世紀に生まれた感受性の言語は、19世紀においてより洗練された言語となっていきます。その背景には生理学や医学の発達、さらには心理学という新しい領域の開拓が背景にあります。それがヴィクトリア朝文学とどう関わっているか、フランシス・オゴーマンの議論を参考にして考察してみます。

第12回
第１２回　痛みと言語
第１１回での議論を参照しながら、「痛み」という感覚および概念が小説言語とどう関係しているかを、具体的な事例にそって考えてみます。

第13回

第１３回　近代に挿入された中世
ヴィクトリア朝文学を形容するもう一つの重要な側面は中世主義です。その概要にて俯瞰し、その意味を考えてみます。

第14回

第１４回　全体のまとめ
学期全体で学習したことを俯瞰してみます。

その他
小論文の提出とそれについてのフィードバック

成績評価方法

毎回のコメント（欠席・未提出の場合は5点減）60%、発表20%、最終レポート20%。

テキスト（教科書）

Francis O'Gorman (ed.), A Concise Companion to the Victorian Novel (Oxford: Blackwell, 2005). ISBN 9781405103206

参考書

授業内に提示する。

© Keio University. All rights reserved.　- ver.P.011.fv0m -